

和島村埋蔵文化財調査報告書第12集

宿屋塚遺跡

一般県道久田小島谷線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

新潟県和島村教育委員会

宿屋塚遺跡

一般県道久田小島谷線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

新潟県和島村教育委員会

序

新潟県のほぼ中央、やや海岸よりに位置します和島村は、古代において越後国古志郡の中枢部であったために、「沼垂城」と書かれた木簡や「郡司符」の出土で全国的に注目された国指定史跡『八幡林官衙遺跡』が所在するなど、古代遺跡の分布密度が高い地域として知られています。続く中世の段階においてもその傾向は引き継がれ、鎌倉時代から室町時代の中国製陶磁器・呪符が多量に出土した山田郷内遺跡など、たくさんの集落遺跡が分布し、山稜上のいたる所に「じょう山」と伝承される山城の跡や、触ると祟りがあると戒められてきた塚が数多く残されています。

塚には不思議な伝承を持つものが多く、特に小島谷の『十三塚』にまつわる話が有名です。島田村史第二集『十三塚』には、「大字富岡(現、下富岡)と大字小島谷の堺に、細長く横たわる山の背、与板峠に通じる道路が曲がり曲がって登って行く辺りである。此の辺には小さな塚が沢山ある。一体どの位あるか、恐らく二十数個はあろうと思われる。所が、この塚の数は正確に数えられない、と云うことが昔から語り傳えて残っている。即ち一つ一つと順々に数えて行くが、十三番目になると、確かに今迄あつた所の塚が無くなっている。数え方でも間違っていたかと、又初めから数えなおすが、やはり、十三番目になると他の塚は無くなる。どうも変だと云うので、こんどは反対側から、今まで数えなかった塚の方から数えて行く。所が又しても十三番目で塚が無くなる。今迄其の他に確かにあつたはずの塚が、いくら探しても見つからない。……不思議なこともあるればあるものだと、それからは誰も数えたがらず、いつしか十三番目に消えてしまうので、十三塚と呼ぶようになったということである。」という十三塚の塚数えの話が記載されています。この他、甲冑・太刀とともに葬られた落武者が怨霊となって現れるという『戦武塚』(大字東保内)、戦乱を避けるため寺宝を隠したという『大塚』(大字島崎)、「大乗妙典六万部」を納経したと伝えられる『六万部塚』(大字城之丘)など、さまざまな話が伝えられています。

今回、大字城之丘地内で発掘調査された『宿屋塚』につきましては、残念ながら塚にまつわる伝承は残されていませんでしたが、塚の傍らで火葬墓が発見されるなど塚の謎を解き明かす貴重な調査例となりました。これらの成果を報告する本書が広く活用され、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められることを願っております。

なお、この度の発掘調査にあたりまして、県文化行政課からは適切な指導をいただき、県与板土木事務所・村地域開発課をはじめ関係機関各位、地元の皆様方には多くのご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成14年11月

和島村教育委員会

教育長 下村 孝一

例　言

1. 本書は、新潟県三島郡和島村大字城之丘に所在する、宿屋塚の発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、一般県道久田小島谷線地方特定道路整備事業に伴い、和島村が新潟県から受託して実施した。
3. 調査に要した経費は、確認調査については文化財保護担当部局が負担し、本発掘調査については事業主体である新潟県（担当与板土木事務所）が負担した。確認調査に伴う文化財保護担当部局分については、国庫および県費の補助金交付を受けた。
4. 遺構番号については、遺構種類ごとに番号を付した。
5. 出土遺物は極めて少なく、珠洲焼と不明鉄器が各1点あるのみである。注記は、「00宿屋塚」とし、ほかにグリッド名・層位を記した。
6. グリッド杭の打設は、国土調査公共系座標を基準とし、㈱長測に委託して実施した。また、塚周辺の原地形図および、完掘後の遺構平面図についても同業者に委託（平板測量）し、いずれも1/40スケールで作成した。
7. 整理作業は、調査担当を中心に下記のメンバーの協力を得た。
小田富美子・久住幸江・近藤保・閔川たづ子・高橋智子・早川雅子・山口八千代（五十音順）
8. 本書の執筆は、全て調査担当が行った。
9. 調査・整理体制は、以下の通りである。

調査主体	和島村教育委員会	教育長	下村孝一
調査担当	〃	主任	田中　靖
調査員	〃	主事	丸山一昭
事務局	〃	事務局長	古室　栄
〃	〃	係長	山口正則

10. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏・機関から多大なご教示とご協力を賜った。ここに厚く御礼を申し上げる。
金子拓男・北村　亮・國島　聰・小林昌二・坂井秀弥・澤田　敦・鈴木俊成・閔　雅之・高橋　保・寺崎裕助・寺村光晴・田海義正・戸根与八郎・鳴海忠夫・羽鳥　正・藤巻正信（五十音順）
相村組㈱・㈱長測・新潟県教育庁文化行政課・新潟県与板土木事務所
12. 【グリッドの設定と各地区の呼称】
塚の主軸方向に合わせた任意の2点(座標値：K1点 X = 174452, 274 Y = 20839, 320、K13点 X = 174432, 296 Y = 20840, 262)を基準とし、5m × 5mを1区画としてグリッドを設定した。各グリッドの呼称は、南北方向をローマ数字、東西方向をアラビア数字でそれぞれ表し、第1図に示したとおり「I-1・I-2・I-3……」のように表現した。
なお、各基準点については、県道久田小島谷線測量時に設置した公共座標の基準点を点とし、標高については県道BMを利用することで、道路設計図と整合性がとれるようにした。

目 次

序
例言
目次
挿図目次
表目次
国版目次

第I章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯.....	1
2. 発掘調査および整理作業の経過.....	1
(1) 確認調査.....	1
(2) 本調査.....	2
(3) 整理作業.....	2

第II章 遺跡周辺の環境

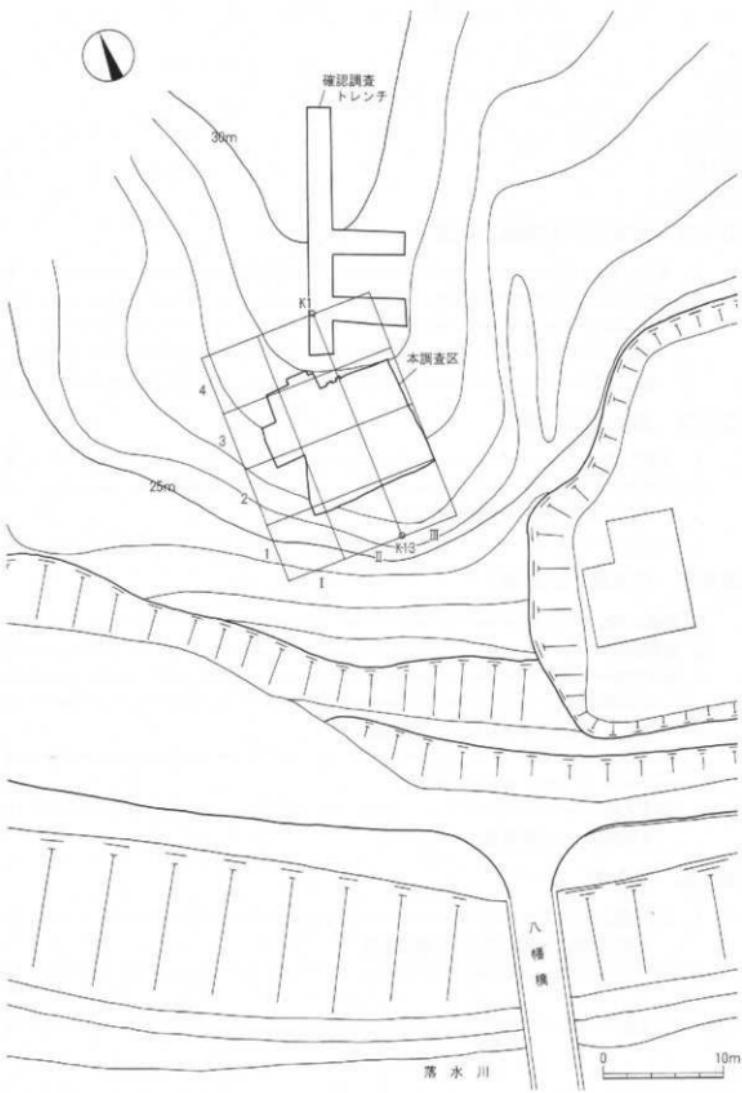
1. 地理的環境.....	3
2. 歴史的環境.....	3
*古代の和島村、*中世の和島村	
3. 和島村の塚.....	4

第III章 発掘調査の概要

1. 遺跡の概要.....	7
2. 基本層序.....	7
3. 遺構各説.....	8
(1) 宿屋塚の調査..... *形状・規模、*構築方法と内部施設	8
(2) その他の遺構..... *SX01、*SD01、*SD02、*SD03	8
4. 出土遺物..... *珠洲焼、*不明鉄器	10

第IV章 まとめ

1. 宿屋塚について..... *構築方法、*塚の性格、*塚の年代	13
2. 塚下層の遺構について.....	13
引用・参考文献.....	14



第1図 グリッド設定図

挿図目次

第1図 グリッド設定図	例言
第2図 周辺の塚分布図	5
第3図 宿屋塚遺跡基本層序柱状模式図	7
第4図 宿屋塚遺跡現況図、塚土層断面図	9
第5図 宿屋塚遺跡下層遺構平・断面図	11
第6図 出土遺物とその平面分布	12

表 目 次

第1表 整理作業工程表	2
第2表 周辺の主な塚一覧	6

図版目次

図版1	▲宿屋塚遺跡遠景(南→北)、▼宿屋塚調査前状況(北→南)
図版2	▲宿屋塚土層断面(西→東)、▼同(南→北)
図版3	宿屋塚調査前状況(南→北)、同左(西→東)、塚北平坦面確認調査状況、確認調査風景、塚表土除去状況、塚調査風景、塚下層遺構完掘状況、塚下層調査風景
図版4	SX01・SD01～02完掘状況(北→南)、SD01土層断面(南→北)、SX01確認状況(北→南)、SX01土層断面(西→東)、SX01完掘状況(北→南)、SD03土層断面(北→南)、SD03完掘状況(北→南)、出土遺物(珠洲焼・鉄器)

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

一般県道久田小島谷線は、海岸線を走る国道402号線と内陸部を縦貫する国道116号線とを結び、さらに主要地方道長岡和島線につながる、重要な幹線道路である。本道路は海岸部へのアクセス道路のひとつとして交通量が多く、幅員の狭さ・カーブの多さが大きな問題となっていた。それを解消するために、昭和63年度から県単事業として道路の改良工事が継続されている。

本事業に伴う埋蔵文化財関係の調査としては、平成12年11月に実施した、大字城之丘地内の確認調査が最初である。同調査では遺構・遺物は全く発見されず、遺跡台帳に記載された周知の城之丘遺跡（古代）は、道路予定地まで広がらないことが明らかになった。

平成13年度の施工分については、前述した確認調査時に遺跡の有無の照会があり、遺跡台帳で周知の遺跡が存在しないことを確認。地質的にみても落水川沿いの泥炭層地帯であり、集落が立地しそうな地点はないことから、工事の実施に支障はない旨、与板土木事務所に回答した。

平成13年10月31日、与板土木事務所より未知の塚が発見されたとの連絡を受ける。同日、担当職員の案内で現地を踏査したところ、道路拡張のため切土となる丘陵先端部で、一辺5.7m・高さ1.5m程の明確な方形塚を確認した。与板土木事務所の説明では、「立木伐採が済み工事準備にかかろうとした所、地権者の羽鳥正氏より塚の存在を知られ、発掘調査の必要性について質問された。」とのことであった。

11月1日、羽鳥氏より塚の由来について説明を受ける。これをもとに遺跡台帳の内容を検討した結果、本塚は周知の遺跡である「宿屋塚」であり、遺跡台帳に記載された位置が、実際より一尾根ずれていたことが明らかになった。本塚は昭和50年代に発見されており、遺跡台帳への登録時に位置を誤ったものと推定される。同日午後、与板土木事務所と今後の遺跡の取り扱いについて協議を行い、①塚部分については、確実に本発掘調査が必要なこと。②塚の北側に人為的な削平面が観察され、塚に関連する何らかの施設の存在が予想されることから、早急に確認調査を実施する必要があること。③確認調査および本発掘調査が終了するまで、この部分の工事を中断すること。④費用負担は、確認調査分を文化財保護部局が持ち、本調査分については開発部局が持つこと。⑤与板土木事務所は、早急に文化財保護法第57条の3第1項に基づく通知を、新潟県教育委員会に提出（和島村教育委員会経由）すること。の5点で合意した。

2. 発掘調査および整理作業の経過

(1) 確認調査

11月5日、尾根上に器材を搬入。塚の載る緩斜面一帯の除草作業および枝木の片付け。

11月7日、掘削前の現況写真撮影および試掘個所の繩張り。

11月8日～11月12日、塚背後に広がる平坦面の確認調査。調査個所は、尾根中央に設定した南北方向の1Tをメインに、それと直交する枝トレント2T～3Tであった。調査面積は、3トレント合計で260m²であった。各トレントともに遺構・遺物が検出されなかつたことから、本調査必要範囲は塚周辺の100m²の範囲に限定されることが明らかになった。これを受け、与板土木事務所に調査範囲が確定したことと、

連続して本調査に移行したい旨を連絡、了解を得た。同日付で、与板土木事務所と宿屋塚遺跡本調査に係る受託契約を締結し、本調査の準備に入る。

(2) 本調査

- 11月13日、本格的な調査に備え、作業員休憩用のユニットハウスと仮設トイレを設置する。
11月15日、塚の現況写真撮影および、塚の区割り・セクション位置の決定を行う。
11月19日、塚本体および周辺部の発掘調査に着手。表土剥ぎを開始したところ、塚裾部に隣接する地点(II-3グリッド付近)で焼骨・焼土粒・炭化物の集中地点が検出され、火葬墓の存在が明らかになる。また、III-2グリッドの塚表土からは、珠洲焼の小片が出土する。
11月22日、塚を構成する盛土深部より、不明鉄器片が出土。
11月23日～11月28日、この間、時雨・強風の悪天候が続き、現場作業を中断せざるを得なかった。
12月3日～12月4日、塚セクションの写真撮影と実測作業。実測終了後、順次セクションの取り外しと、塚下層遺構の確認・掘削を実施する。
12月5日、塚下層遺構の確認・掘削作業を午前中で終え、午後には完掘状況の写真撮影を実施する。撮影終了後、各種器材の撤収を行い、本日をもって実質的な現場作業は終了となる。
12月14日、測量委託業者が作成した遺構平面図の校正を現地にて行い、誤りが無いことを確認。同日、与板土木事務所に、宿屋塚遺跡の現地調査が完了したことを報告する。

(3) 整理作業

宿屋塚遺跡の整理（報告書作成）作業については、平成13年度の冬期間および、平成14年度の6月から11月にかけて実施した。出土遺物が非常に少なかったため、作業の主体は、遺構関係の図面整理・トレース・原稿執筆であった。報告書刊行までの作業工程等は、下表の通りである。

作業内容	平成13年度			平成14年度								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
遺物水洗注記		■										
遺物実測トレース							■					
遺物写真撮影												
遺構写真整理	■	■										
遺構図面整理		■	■			■	■					
遺構トレース					■	■	■	■				
図版作成						■	■	■	■			
原稿執筆								■	■			
校正										■	■	刊行

第1表 整理作業工程表

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

1. 地理的環境

宿屋塚遺跡は、新潟県三島郡和島村大字城之丘1146番地に所在している。和島村は、新潟県のはば中央部、中越地方の海岸寄りに位置しており、地形的には、三島山地から派生する『東側丘陵』・海岸に面した『西側丘陵』・両者に挟まれた島崎川沿いの沖積低地、の三種類に分類されている（藤田・長谷川1996）。

今回調査された宿屋塚遺跡は、地形区分でいえば西側丘陵上に立地しており、分水嶺より500m程、島崎川低地側に寄った地点に所在し、海岸線からの距離は約650mを測る。遺跡が載る尾根は、主稜線上のビーグル（標高74.8m）から分岐した一支脈であり、落水川に向かってほぼ南西方向に伸びる。

西側丘陵は、西山町別山付近で東側丘陵から分かれて北北東に向かうもので、先端は弥彦・角田山塊に連なっている。本丘陵は、『寺泊丘陵』とも呼称され、稜線が著しく海側に偏在する傾向がある。これは、丘陵の海側が海水の作用で浸食された結果と考えられており、海岸部では直線状の急崖（海食崖）が明瞭に認められる。遺跡に近い落水・山田海岸付近でも、同様な地形が顕著に観察され、山が海に迫り屏風のような急傾斜地が連続する特異な景観となっている。

2. 歴史的環境

古代の和島村 和島村は、古代において越後国古志郡に属していたと考えられている。古志郡は、現

在の三島郡および長岡市周辺の信濃川流域にほぼ比定されており9世紀代に三島郡が分離する以前には、柏崎市と刈羽郡一帯を含む広大な領域を持っていた。10世紀前半に成立した『和名類聚抄』には、三島郡分立後の古志郡の郷として、大家・栗家・文原・夜麻の4郷が記載されている。この中の大家郷は、和島村周辺に郷域を設定できる可能性が高い。郡内の延喜式内社は、三宅（2座）・桐原石部・都野・小丹生・宇奈具志の5社6座があり、このうち桐原石部・小丹生・宇奈具志の3座は、和島村を中心とした島崎川流域に集中している。この式内社の分布や郡家（八幡林官衙遺跡・下ノ西遺跡）の所在に象徴されるように、和島村を含む島崎川流域は、古志郡の中枢部としての役割を担う地域であった。

平安時代の後半 平安時代の後半からは、荘園と公領が併存する時代となる。三島郡内でも、国衙領で

中世の和島村 ある保とともに、多くの寄進地系の荘園が記録されている。和島村に直接関係するものとしては、出雲崎町乙面から和島村東保内にかけての地域に比定される国衙領乙面保と、三島町を中心とした出雲崎町から和島村の一部と考えられる吉河莊・長岡市西部から三島町・和島村・出雲崎町の一部とされる白鳥莊の3つがあげられる。保は多くの場合、国衙周辺や港・河川など交通の要衝に設置されたとされ、和島村周辺には乙面保の他に、於木保（信濃守）・小加礼保（守内人保・守内物井）などが分布する。

鎌倉時代の終わりになると、和島村は信濃出身で越後に進出してきた風間氏の勢力下となる。風間信濃守は、元亨三（1323）年、和島村田村の地に日蓮宗越後一宗大本山の格式を持つ本山妙法寺（新田）を建立したことでも知られている。風間信濃守信明の弟である村岡三郎は、村岡城を築いて和島村周辺を領有し、直峰城（新田）を本拠とする信濃守に代わって妙法寺の檀那となった。建武二（1335）年、足利尊氏と新田義貞が対立すると、風間信濃守らは義貞の陣営に属した。以後、越後は足利方（北朝方）と新田方（南

朝方）に分かれ、長い争乱状態となった。和島村周辺も戦場となり、南朝方に属する風間信濃守・小木・河内為氏らは、建武三（延元元）年、島崎城（島崎村）に立てこもり、北朝方の色部高長・加地景綱らと戦ったが敗れた。

室町時代になると、越後の統治は守護職上杉氏の相伝となつたが、実際はその代官の手に委ねられた。守護代となつたのは、上杉氏古来の家臣である長尾氏である。長尾氏は、府内（上越市）を拠点に、一門を各地に配置して地方支配を行つた。古志郡は藏王堂城（長野県）が中心で、ここを本拠とした長尾一族を古志長尾氏と呼称し、室町後期には東山の柄吉城（長野県）に拠点が移り、柄吉長尾氏とも呼ばれた。和島周辺では、夏戸城（長野県）の志駄氏、本与板城（長野県）の飯沼氏など、有力な家臣の配置が知られている。

下剋上を経て、守護上杉氏から実権を奪つた長尾氏は、度重なる抗争を勝ち抜き越後の支配権を掌握する。長尾景虎（上杉謙信）は、越後府内に亡命してきた関東管領上杉憲政より上杉家の家督が譲られ、永禄四（1561）年には、関東管領職に就任している。謙信没後、後継者争いである御館の乱を経て、越後は上杉景勝の支配となり、慶長三（1598）年の会津移封までこの体制は続く。戦国・織田期の和島村には、力丸・高森・池浦などの諸氏が存在したことが、文献によって明らかにされている。力丸は根小屋城（長野県）を本拠とし、上杉家の「軍役帳」に名が見えるなど、上杉氏の下で活躍した武将である。高森・池浦両氏は、与板城主直江に仕える与板衆に属していた。「上杉家御家中年譜」では、高森氏は高森（長野県）、池浦氏は島崎（長野県）をそれぞれ本拠にしていたことが記されている。これらの諸氏は、上杉景勝の会津移封に伴い、主家に従い会津に移住していった。

3. 和島村の塚

島崎川流域は、新潟県内でも有数の塚が多く分布する地域である。和島村内における塚は、「新潟県埋蔵文化財包蔵地カード」および『和島村史』によれば、69遺跡（157基）を数え、村内に満遍なく分布している。その立地は、集落から遠く離れた山頂部に所在するものと、集落に接した丘陵尾根上に所在するものとがあるが、後者の場合がほとんどである。いずれの塚も、眺望がきき集落から仰ぎ見る地点に構築されており、集落・人との密接な関係が想定されている（鳴海1996）。

塚には単独で所在するものと、複数で構成されるものに分類できる。前者の例は、今回調査した宿屋塚の他、小谷御経塚（島崎）・奈良崎塚（島崎）など40遺跡が該当する。後者は29遺跡あり、2～3基の塚で構成される場合が多いが、12基の塚が列をなす立野塚群（島崎）や、7基の塚が集中する十三塚群（下富岡）など、尾根線上で明確な列・群構成をなすものも存在する。

塚の形態は円形塚と方形塚がある。『新潟県埋蔵文化財包蔵地カード』では、ほとんどが円形塚と記載されているが、和島村史編纂のための調査の結果、半数は方形塚であることが明らかになった。規模は、直径が20mを超える双子塚1号塚（島崎）のようなものもあるが、直径5～10m・高さ1～2mのものが多い。

塚の性格は、土葬墓・火葬墓を周囲に伴う奈良崎塚・宿屋塚が墳墓に関連するとみられる以外、大多数のものは不明である。塚にまつわる伝承をみると、「武士や戦死者を埋葬した塚」「馬を埋葬した塚」「御経を埋めた塚」「刀剣・甲冑を埋めた塚」「村の境としての塚」「寺院の興廢に関わる塚」など様々であり、墳墓や經塚、境塚、信仰塚などの可能性を示唆するが、詳細は今後の検討課題と言えよう。



第2図 周辺の塚分布図

No.	名 称	所 在 地	形状・基数	そ の 他
1	馬道塚群	寺泊町大字年友	円形2基	
2	お経塚	〃 〃	円形1基	
3	年友城塚群	〃 〃	円形3基	
4	中村塚群	〃 〃	円形3基	
5	松田の四ツ塚	〃 大字松田	方形4基	
6	坊山塚群	〃 大字志戸橋	方形4基	平成3年度発掘調査
7	花立塚群	〃 〃	方形2基	〃
8	奈良崎塚	和島村大字島崎	方形1基	平成4年度発掘調査
9	小谷御経塚	〃 〃	円形1基	平成10年度発掘調査
10	双子塚群	〃 〃	方形1基・円形1基	
11	立野塚群	〃 〃	円形13基	
12	島崎大塚	〃 〃	方形1基	
13	島崎塚	〃 〃	円形1基	
14	八幡林塚群	〃 〃	円形2基	
15	乗光寺裏山の塚	〃 大字両高(坂谷)	円形1基	
16	乗光寺入山頂の塚	〃 〃 (〃)	円形1基	
17	鍋カブリ塚	〃 〃	円形1基	
18	宿屋の經塚	〃 大字城之丘(落水)	円形1基	
19	宿屋塚	〃 〃 (〃)	方形1基	本書報告
20	六万部塚	〃 〃 (〃)	方形1基	
21	御経塚	出雲崎町大字大寺	方形2基	平成2年度発掘調査
22	イブケ入塚群	和島村大字上桐	円形2基	
23	天が谷の塚	〃 〃	方形1基	
24	北野大平塚	〃 大字北野	方形1基	
25	丸山塚群	〃 〃	方形2基	
26	神明高塚群	〃 大字根小屋	方形1基・円形6基	
27	仏山の塚	〃 〃	方形1基	
28	荒巻塚群	〃 大字荒巻	円形5基	
29	狐塚群	〃 大字下富岡	円形3基	
30	下ノ東塚群	〃 大字小鳥谷	方形6基・円形6基	
31	十三塚群	〃 大字下富岡	方形7基	
32	若野浦経塚群	〃 大字若野浦	方形3基・円形1基	
33	三角点塚群	〃 大字東保内(辺張北組)	方形4基	
34	吉田塚群	〃 〃 (吉田)	方形2基	
35	戦武塚群	〃 〃 (辺張)	方形4基・円形2基	
36	西福寺裏山塚	〃 大字中沢	方形1基	
37	高畠御経塚	〃 大字高畠	円形1基	
38	海円寺跡の塚	〃 〃	方形1基	

第2表 周辺の主な塚一覧

第III章 発掘調査の概要

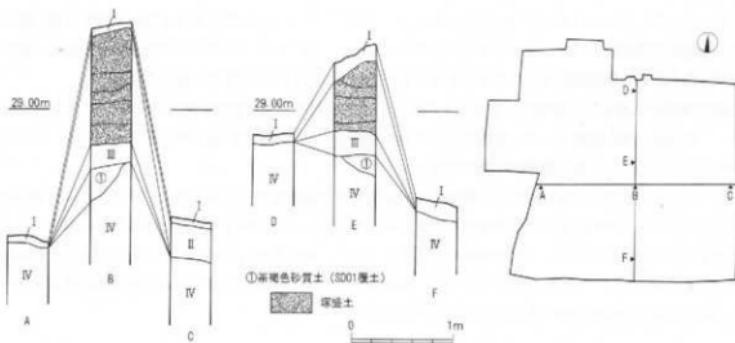
1. 遺跡の概要

宿屋塚遺跡は、方形の塚1基を中心に、それに関連すると見られる火葬墓1基、塚構築前の溝3条、ピット4基から成り立っている。塚部分は、昭和50年代後半頃に周知化されたもので、「新潟県埋蔵文化財包蔵地カード」には、「遺跡番号：Na105、所在地：和島村落水字宿屋、形態：円形（径2m・高さ0.5m）」と記載されている。

本遺跡は、背後の主稜線から分岐し南西方向に伸びる尾根の末端部分に所在し、塚付近の尾根幅は20m前後・標高27~29mを測る。尾根上からの眺望は非常に良く、宿屋塚の上に立つと、海岸部と島崎川沿いの地域を結ぶ県道「久田小島谷線」が眼下に捉えられ、周囲を見渡せば、西に日本海・東に国道116号線が縱貫する島崎川低地・南に越後南朝方の武将村岡三郎の居城であった村岡城跡や、奥行1kmの久田（出雲崎町）へ通じる大沢などが一望にできる。このような立地環境が、同地に塚を構築する大きな要因になった可能性もある。

2. 基本層序

調査区付近の基本層序は、第3図に示した通りである。塚周辺では、草木根が卓越する5~10cmの薄い表土直下で、遺跡の基盤層であるIV層の灰白色土が露出し、塚基底部以外では暗褐色土系の旧表土（III層）は存在しない。この事実は、塚構築に関連して広く周囲の削平が行われたことを示している。塚の東側斜面では、表土下に繊りがない褐色土（II層）が確認される。同層は、塚東側の盛土を一部覆って堆積しており、下層の旧表土には連続しないことから、塚構築以後に形成されたことは確実である。



第3図 宿屋塚遺跡基本層序柱状模式図

3. 遺構各説

(1) 宿屋塚の調査

宿屋塚は、南西方向に伸びる尾根の末端、標高29m付近に所在する。塚の載るこの尾根は、背後の山稜から分岐後、比較的緩斜面が続くが、塚を過ぎた辺りから傾斜がきつくなり、かなりの急角度で沖積地に没入する。調査前までは、広葉樹を主体とした山林になっており、塚の盛土上にも根回り40~80cmを測る樹木が育っていた。最大のものは、東南のコーナー付近にあった樺である。伐採後に年輪を確認したところ約90年を数え、塚の構築時期はそれより確實に遡る。

『新潟県埋蔵文化財包蔵地カード』上での宿屋塚は、径2m・高さ0.5mの円形塚と記載されている。しかし、今回の調査結果によって、一辺約5.7m・高さ最大1.5mを測る方形塚であることが明らかになった。

本塚は、北西側のコーナーが山道の開鑿により現状をとどめないほか、土砂の流失・木根による搅乱等が原因で、北辺ラインの遺存状態があまり良くない。墳頂部には、ほとんど朽ちた赤松の切株があり、周囲は大きな窪地となっていた。この窪地は、木本体の土壤化・体積減少によって形成された可能性が高く、土層観察でもそのことは裏付けられた。塚の断面形は、南北方向では頂部が丸みを帯びた山笠形、東西方向では東の肩が西のそれより若干高くなる台形状を呈する。塚の主軸方向については、ほぼ尾根の方向と一致しており、N-7°-Wを向く。

本塚は、方形の基底部を削りだした後、その上に盛土がなされている。「基本層序」構築方法と項でも述べたように、基底部削り出しの際、尾根上ののかなり広い範囲で表土除去・基盤内部施設層の削平が行なわれており、塚部分以外に暗褐色土系の旧表土は存在しない。また、周溝については、調査時に精査したが確認することはできなかった。

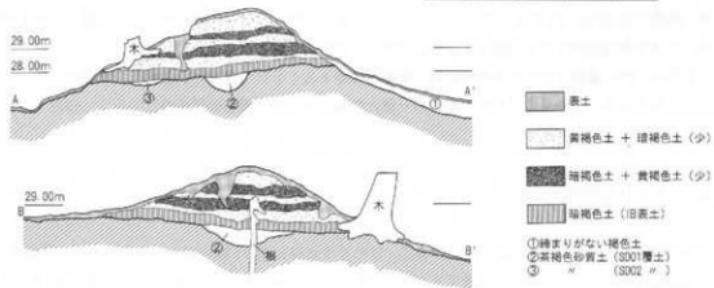
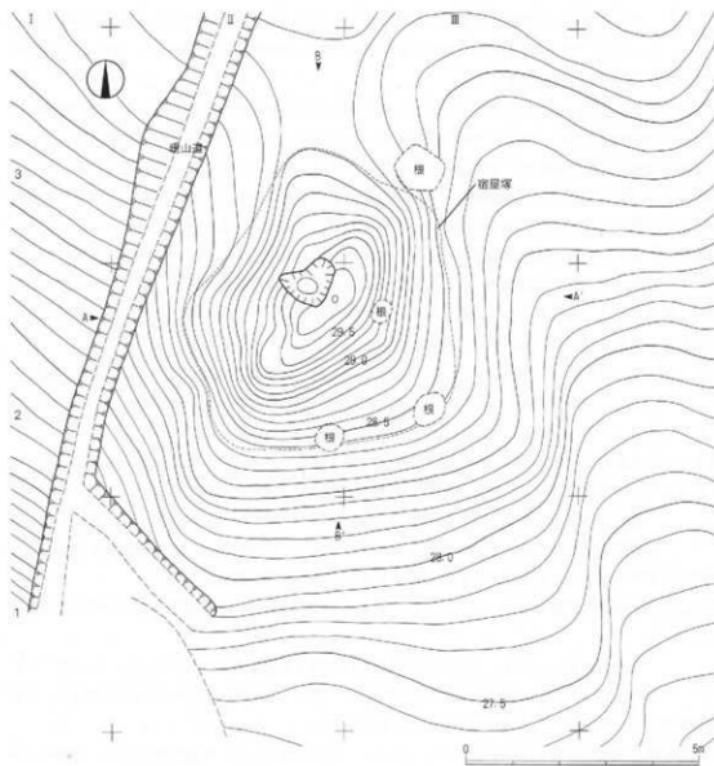
土の盛り上げは、大きく5回に分けて実施されており、旧表土上に黄褐色土（基盤層が酸化したもの）と暗褐色土を交互に積み重ねている（第4図）。盛土の各層は、東西方向においてほぼ水平であるが、南北方向では北から南に緩く傾き、尾根の傾斜に規制されている。層の厚みは、盛土最上層の黄褐色土が40cmを超える以外、それぞれ8~25cmの領域に収まる。各層は、木根による搅乱部分を除いて非常に良く継まり、版築の工法が取られている。盛土の供給源としては、前述したように周溝を伴わないことから、塚周辺での表土除去・基底部削り出しによって得られた土砂を利用しているものと考えられる。

盛土内部から出土した遺物は、第6図1に示した器種不明の鉄器片が唯一確実なものとして上げられる。このほか、塚の東南コーナー付近で発見された珠洲焼小片（同図2）もその可能性があるが、ごく表層からの出土であったため詳細は不明である。

次に内部施設について見てみたい。墳丘の中央付近に内部施設等の存在を予想し、平面および土層断面を観察しながら段階的に盛土の除去を行ったが、盛土中あるいは基底部上で何ら内部施設を確認することはできなかった。塚に関連する可能性がある遺構としては、墳丘北辺付近で検出された火葬墓S X01があげられる。S X01は、塚北辺の想定プランと一部重複するが、この付近における墳丘の遺存状況が悪いため、塚の構築と火葬墓造営の先後関係については不明であった。

(2) その他の遺構

塚の周囲および、塚基底部の盛土下層で検出された遺構としては、火葬墓1基・溝3条・ピット4基が



第4図 宿屋塚遺跡現況図、塚土層断面図

ある（第5図）。以下では、主要な遺構について概要を述べる。

S X01 II-3グリッドで検出された火葬墓。掘り込みは、楕円形土坑が南北に2つ連結したような、T字に近い形状を持ち、北側の掘り込みが深い二段構造となっている。規模は、南北160cm・東西120cm・最大深度16cmを測る。

覆土は茶褐色砂質土を基調とする下層と、北側の掘り込みにのみ堆積する焼骨・灰・炭・焼土粒が卓越した上層の2つに大別される。前者の茶褐色砂質土は、S D01など塚下層で確認された遺構の覆土と共通する。上層に含まれていた焼骨は、全て細片・粉末化しており、人骨と断定できる資料は無い。しかし、奈良崎塚・小谷御経塚のように、塚の傍らに墳墓が営まれる例も少なからずあることから、本例も火葬墓である可能性が高いと思われる。出土した骨粉・灰等の総量は、約96gであった。

前述したようにS X01は、塚北辺の想定プランと僅かに重複して存在する。ここで問題になるのが、火葬墓と塚の先後関係である。残念ながら、この付近における墳丘の遺存状態が悪く、両者の切り合い関係を層位的に把握するまでには至らなかった。しかし、火葬墓の位置が、塚構築時に大きく削平された地点であることを考えると、塚より先行する可能性は低いと言えよう。

S D01 III-3～I-2グリッドにかけて検出された溝。主軸方向はN-25°-Eを向き、尾根を斜めに横切る形で構築されている。溝の規模は、幅90cm前後・最大深度40cmを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は、縦まりがある茶褐色砂質土の単層である。

本溝からの出土遺物は無く、所属時期・機能を特定することはできないが、溝が完全に埋没した後に塚の盛土がなされている点からみて、塚との間には若干の時期差が想定される。

S D02 II-3～II-2グリッドにかけて検出された溝。主軸方向は、隣接するS D01より若干東に偏航しており、N-35°-Eを向く。溝の規模は、幅40cm前後・最大深度10cmを測り、断面形は浅いU字形を呈する。覆土は、S D01と同じ縦まりがある茶褐色砂質土である。

本溝からの出土遺物は皆無であり、塚より先行することが明確な以外、所属時期・機能を特定することはできない。

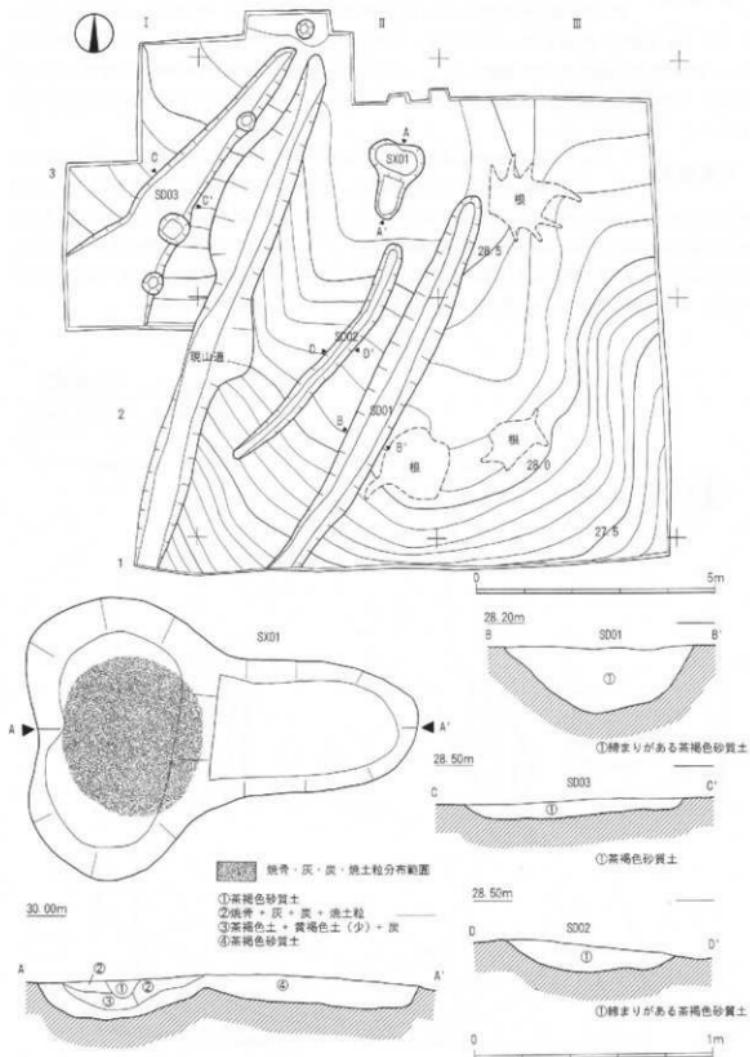
S D03 II-3～I-3グリッドにかけて検出された溝。主軸方向は、S D02に近いN-35°-Eを向く。本溝は、下方に行くほど幅が広がっており、末端での幅220cm・最大深度10cmを測る。断面形は浅いU字形を呈し、壁の立ち上がりは緩やかである。

溝の底面には、東辺に片寄った位置に4個の浅いビット列が観察される。底面のビットは、直径40～65cm・深度10cm前後の円形を呈するが、各ビット相互の間隔に規則性は認められない。溝・ビットの覆土は、やはり茶褐色砂質土を基調とするが、他の溝とは異なり縦まりに乏しい。

本溝は、出土遺物皆無のため所属時期・機能を特定することはできない。しかし、底面に浅い円形ビット列を伴う点は、道路遺構とされるものの一部に類似しており、現在の尾根道に先行する道路であった可能性も考えられよう。

4. 出土遺物

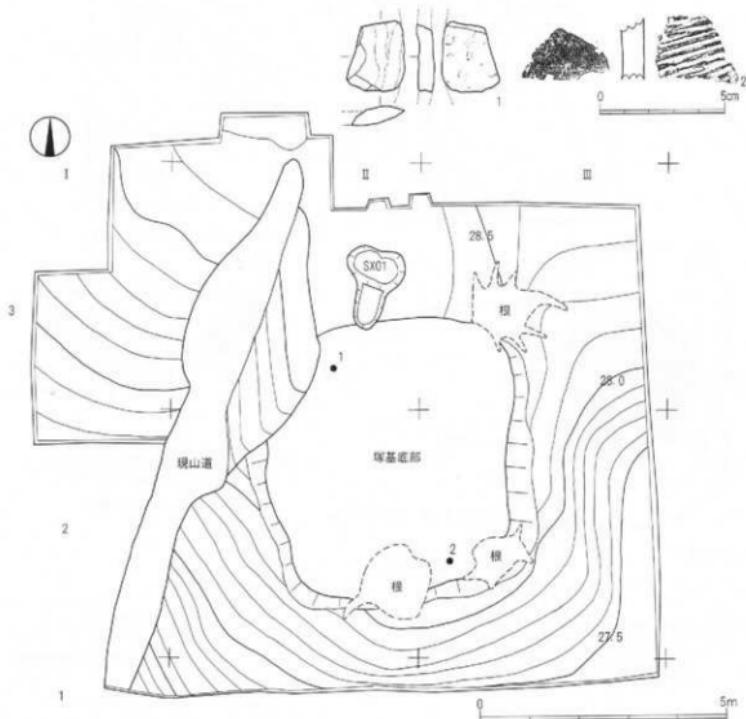
今回の調査で出土した遺物は非常に少なく、塚のごく表層および、塚の盛土中で検出された珠洲焼1点・不明鉄器片1点の、合計2点が存在するだけで、塚以外の箇所からの出土は皆無であった。以下では種別に出土遺物の概要を述べる。



第5図 宿屋塚遺跡下層遺構平・断面図

珠洲焼 第6図2は、塚のごく表層(III-2グリッド、塚の南東コーナー付近)で発見された珠洲焼の甕、あるいは壺の体部破片である。縦2.8cm・横3.7cmほどの大きさで、厚さは1.1cmを測る。色調はくすんだ灰色だが、外面には自然釉がかかり若干光沢を帯びる。胎土はやや粗く、海綿骨針を少量含む。器面調整としては、外面に平行打圧痕、内面に円形押圧痕が観察される。本資料は、小片のため所属時期の詳細は不明だが、塚の構築年代が中世に遡る可能性を示唆するものといえよう。

不 明 鉄 器 第6図1は、塚の盛土中(最下層の黄褐色土中)で発見された器種不明の鉄器片である。出土位置は、II-3グリッド付近、塚の北西コーナーに近い地点であった。縦2.8cm・横2.2cm・厚さ最大0.5cmほどの大きさであるが、二次的に大きく欠損しているため、全体像は不明である。表面の色調は、片面が暗赤褐色、反対面は黒色を呈する。破断面には層状の構造が顕著に観察され、一部金属光沢を残すなど保存状態は良好である。この鉄器片は、塚盛土中で発見された唯一確実な資料であるが、器種不明な小片のため、塚構築に伴う遺物かどうか現状では判断できない。



第6図 出土遺物とその平面分布

第IV章 まとめ

1. 宿屋塚について

今回の調査対象でメインとなったのは、一辺約5.7m・高さ最大1.5mの方形塚「宿屋塚」である。以下では、調査によって明らかになった塚の構築方法・性格・年代について、簡単にまとめてみたい。

構築方法 塚は、基底部を方形に削り出した後に盛土がなされている。その際、尾根上のかなり広い範囲で表土除去・基盤層の削平が行なわれ、塚部分以外に暗褐色土系の旧表土は存在しない。構築にあたっては、周溝の掘削を行わないまま盛土を開始している。盛土は削平等によって得られた土を利用し、暗褐色土系と黄褐色土系の土を交互に5回にわたって積み上げている。墳丘内部では、埋葬あるいは埋納に関わるような遺構は一切確認されていない。

塚の性格 墳丘内部において、構築意図を特定できる遺構・遺物は検出されなかったが、塚に近接して発見された火葬墓（SX01）の存在は、塚の性格を考える上で非常に注目される。和島村内では、塚と墓がセットになって発見された例としては、奈良崎塚があげられる。同塚は、平成4年に発掘調査が行われたもので、調査の結果、一辺10m、高さ2mを測る方形塚の周囲から、六道鉄を伴った土葬墓などの墳墓が複数検出され、塚と墓との密接な関連が想定されている（鳴海1997）。

本遺跡の火葬墓は、塚の中軸線上、墳丘北裾に接する位置に営まれている。1基単独である点で、奈良崎塚周辺の状況とは異なるが、配置からみて、塚と墓が一連のものである可能性は極めて高い。そうであるならば、奈良崎塚と同様に本塚も、墳墓に伴う供養塚の性格のものとして理解できる。

しかし、塚がすでに存在し、後世その傍らに墳墓が営まれ二次的に共存したとみると、全く別の機能を考える必要が出てくる。本塚の位置は、海岸から向かった場合、落水集落のちょうど入口にあたり、集落・街道から見渡せる丘陵先端部に単独で構築されている点は、「標」としての機能を持つ塚のそれに近い（品田1992）。また、山地の主稜線に向かう山道に隣接していることから、山地と沖積地との境界を示していると考えることもできよう。

以上、本塚の性格について、考えられる幾つかの可能性をあげたが、現時点ではそれらを実証する手段は無く、機能の確定までには至らなかった。

塚の年代 最後に宿屋塚の構築年代について考えてみたい。墳丘上に生育していた桟の年輪は約90年を数え、塚がそれ以前に構築されたことは確実である。しかし、今回の調査では、塚からの出土遺物は非常に少なく、塚の構築年代を示す可能性がある資料としては、南東コーナー付近で検出された珠洲焼が唯一であった。この資料にしても、ごく表層から小破片の状態で出土している点からみて、確実な共伴とは言えず、構築年代が中世に遡るか否かは今後の検討課題と言えよう。

2. 塚下層の遺構について

塚下層において検出された遺構としては、溝2条（SD01・SD02）があげられる。両者は、いずれも塚盛土下の旧表土除去後に確認されており、土層断面の検討から明らかに塚構築に先行する遺構である。覆土は非常に良く締まった茶褐色砂質土であり、遺構内部以外に同質の土は存在しない。

S D01・S D02からは、まったく遺物が出土しなかった。このため、所属時期・構築目的等について明らかにすることはできなかった。

引用・参考文献

- 久我 勇 1999 『和島村の地名』新潟県三島郡和島村村落史資料集別冊
- 品田高志 1992 「新潟県における塚（群）研究の現状と課題—考古学・民俗学から社会史的理解に向けて—」『新潟考古学談話会会報』第10号 新潟考古学談話会
- 寺村光晴 1950 「十三塚—古代の島田村一」島田村史第二集 島田中学校
- 花ヶ前盛明 1996 「中世の和島村」「和島村史」資料編Ⅰ 自然・原始古代・中世・文化財
- 花ヶ前盛明 1996 「鎌倉室町時代の和島村」「和島村史」資料編Ⅱ 自然・原始古代・中世・文化財
- 藤田 刚・長谷川正 1996 「和島村の地形・地質」「和島村史」資料編Ⅲ 自然・原始古代・中世・文化財
- 鳴海忠夫 1996 「和島村の塚」「和島村史」資料編Ⅳ 自然・原始古代・中世・文化財
- (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1992 「奈良崎遺跡第2次調査」「埋文にいがた」創刊号(No.1)
- 新潟県教育委員会 1980 『昭和54年度 新潟県遺跡地図(付、史跡・名勝・天然記念物等所在地)』
- 和島村 1996 『和島村史』資料編Ⅰ 自然・原始古代・中世・文化財
- 和島村 1997 『和島村史』通史編

図 版



▲宿屋塚遺跡遠景（南→北） ▼宿屋塚調査前状況（北→南）



▲宿屋塚土層断面（西→東） ▼同（南→北）



宿屋塚調査前状況（南→北）



同左（西→東）



塚北平坦面確認調査状況



確認調査風景



塚表土除去状況



塚調査風景



塚下層遺構完掘状況



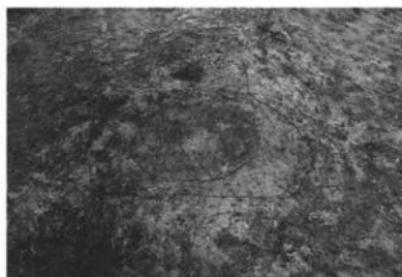
塚下層調査風景



S X01・S D01~02 完掘状況（北→南）



S D01土層断面（南→北）



S X01確認状況（北→南）



S X01土層断面（西→東）



S X01完掘状況（北→南）



S D03土層断面（北→南）



S D03完掘状況（北→南）



出土遺物（株洲焼・鐵器）

報告書抄録

ふりがな 書名	しゆくやづかいせき 宿屋塚遺跡							
シリーズ名	和島村埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第12集							
編著者名	田中 靖							
編集機関	和島村教育委員会							
所在地	〒949-4511 新潟県三島郡和島村3434番地4 TEL 0258-74-3111							
発行年月日	2002年11月15日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しゆくやづかいせき 宿屋塚遺跡	新潟県三島郡和島 村大字城之丘	154041	105	37° 34' 19"	138° 44' 09"	2001-11-13 ～ 2001-12-14	約100m ²	県道改良 事業に伴 う本発掘 調査
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宿屋塚遺跡	塚	中世？	塚1基・火葬墓1基・溝3条・ピット4基		珠洲焼・不明鉄器		塚は、一辺5.7m・高さ最大1.5mを測る方 形塚。	

和島村埋蔵文化財調査報告書第12集
一般県道久田小島谷線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

宿屋塚遺跡

平成14年11月6日印刷
平成14年11月15日発行

編集・刊行 新潟県和島村教育委員会

〒949-4511 和島村大字小島谷3434番地4

電話 0258-74-3111㈹

FAX 0258-74-3500

印刷・製本 腹第一印刷所

新潟市和合町2丁目4番18号

電話 025-285-7161